

平成 12 年 9 月東海豪雨災害に関する実態調査 調査報告書

はじめに

台風 14 号と秋雨前線の影響により、平成 12 年 9 月 11 日から 12 日にかけて名古屋市を中心とした東海地方では、多いところで 500mm を越える記録的な豪雨に見舞われた。おおむね 500 年に一度の豪雨とも言われるこの豪雨では、年間総雨量のおよそ 3 分の 1 に当たる雨量が、わずかな時間に集中したため、東海地方を中心に各地に大きな被害が発生した。その被害は、愛知県だけでも死者・行方不明者 7 名、負傷者 92 名、床下浸水家屋 39,544 棟、床上浸水家屋 23,896 棟にのぼった。

本報告書は、この東海豪雨災害における住民の対応行動の実態を、住民に対するアンケート調査に基づいてとりまとめたものである。調査の対象地域は名古屋市とその近郊において大きな被害が発生した地域であり、調査項目は、浸水状況、被害実態などの事実関係、災害情報伝達、その時々住民意識、避難などの対応行動など多岐にわたっている。これらの調査項目はすべて、「住民から見た東海豪雨災害」を把握することに主眼をおいて設定されたものである。

かつて経験したことがない歴史的にも希な事態のなかで、住民がどのような状況におかれ、何を思い、如何に行動したのかを把握するなかで、この東海豪雨災害で何が問題であったのか、今後の洪水災害に対する危機管理として、何が重要なのかを読み取る資料として活用して頂けたら幸いである。

この調査は、土木学会東海豪雨災害緊急調査団の調査活動、ならびに、文部省科学研究費突発災害調査研究の調査活動の一環として、群馬大学片田研究室が中心となって行ったものではあるが、調査の遂行に際しては、調査票の設計、資料提供、調査票の配布回収などの様々な面で次のような多くの方々からご協力、ご支援、ご助言を頂いた。ここに記して深謝する次第である。

京都大学防災研究所巨大災害研究センター、関西学院大学社会学部立木研究室、名古屋大学大学院地圏環境工学専攻辻本研究室、東北大学大学院災害制御研究センター、建設省、(財)河川情報センター、愛知県、名古屋市、西枇杷島町、新川町

また、被災後、まだ日の浅い時点での調査であったにもかかわらず、調査対象地域の住民の皆さまには、後片づけや復旧作業で大変お疲れのなか、多くの方々に協力して頂き率直な意見を多数寄せて頂いた。ここに寄せて頂いたご意見に基づいて、今後の防災研究を一層推進するよう努力することをお約束し感謝に代えたい。

平成 13 年 1 月
群馬大学工学部建設工学科 都市工学講座 片田研究室
代表 片田敏孝